

どはガラリと態度を一変させた。九の内の私の事務所近くでビラをまく。雑誌に広告を出しても
らっている会社に「掲載中止」を呼びかける。兵器攻めと銃操弾による非難攻撃の両面作戦で私
に自願を掲げさせようとしたわけだ。その間に谷口勝一（兎玉泰三の弟）を使者に立てて、兎玉の
大番頭の岡村吉一と手打ちをしたらどうかと、和解の値をもらっかせた。

こうした動きに恐れをなした企業の中には、広告出稿を減らしたり、中止するところも出てき
た。ついに四七年七月、東京地検特捜部に威力業務妨害罪の被害届を出したが、上野の話による
と、「担当横手が興味がなく、うやむやになった」そうである。

上野の場合、まだ本人に対抗できるだけの力があったからよいが、無月なものや会社の体面
を考慮して泣く泣く兎玉の軍門に下ったものも案外多かったらう。政治家や財界人など社会的信
用を第一義に考える立場の人はおおのことである。

「博報堂」乗っ取りの陰謀

兎玉晋士夫が早稲出版問題について「統制機関」をつくる構想をもっていた事実は、あまりよ
く知られていない。だが、この構想は、彼が築いていった「見ざる政府」の組織の拡大強化と
ともに芽生え、ふくらみ、そして一部は実行に移されたのである。

兎玉とその人脈が思ひ利権を追いつけていく過程では、どうしても反対陣営との間で摩擦を
生じる。そうした反対派の動きをおどしとずかして無力化していったが、力による目じ込めには

やはり限界が出てくる。早い話が恐喝などの暴力行為を派手におこなえば津輔音が出るし、それ
だけ犠牲を覚悟しなければならなかった。

こうした犠牲を最小限にとどめ、「見ざる政府」の力を誇示していくには、世論を有利な方
向へ導いていくのが最良の方法であった。とくに総合屋業界の「総元帥」の地位に就いた昭和四
四年頃からのちは、いわゆる兎玉系マスコミを積極的に動員することによって、官界に経済事件
に介入できたし、ライターとしての役割も無難にこなせるようになった。こうした体験が実は、
さらに数多くのマスコミを兎玉の支配下に組み込ませる構想へと発展したのである。もちろんこ
のおき方の根柢には、兎玉が世論は国民大衆が作るものではなくて、マスコミが煽動していく過
程で作られることを知っていた。

そこで、兎玉がマスコミ操作の拠点にしたのが「博報堂」である。

博報堂はわが国の広告業界では電通につぐ第二位の大手。宣伝、PR、マーケティングが主
な業務だが、あらゆる業種の広告をマスコミに橋渡しする際に、「わが社の意向に添わないマス
コミに広告を扱わせるわけにいかない」と拒否権を発動して、博報堂の意のままにマスコミを操
縦できる利点があった。

博報堂が兎玉晋士夫によって乗っ取られたのは、瀬木庸介を社外に追放、福井純二が社長に就
任した四七年一月三〇日である。もともと福井は、瀬木社長と大学同期ということで四〇年二
月、秘書役として入社したが、社内に福井の勢力を植えつけ、瀬木家譜代の役員を総理事のミス

があったといった日史を改めて整理していった。

福井は、常務から専務、そして副社長と出世していくにつれて、社長の椅子に野心を持ったと思われるが、三代目の瀬木庸介社長がまだ三十歳半ばの世間知らずで、社長としては凡庸であったことと、博報堂自体の収益率が年々下降線を描いていたために、社内には「庸介社長では将来が思いやられる」という風潮があったことも福井にさいおいた。ただ福井は己れの野心をとげるために、スキャンダル情報に食いついて金を巻きあげていくブラック・ジャーナリズムを利用したことが、見玉人脈の傘下に入るきっかけをつくらした。「信報新聞」(前川英二)、「中央世論新聞」(愛徳回禮)を使って、瀬木社長が「新興宗教に狂った」とか「某女性に横暴暴した」というニュースを流させた。とくに「信報新聞」には、前後三回も社長の醜聞を特集させて、博報堂社内にはば撒かせたのである。このスキャンダル攻勢にたまりず瀬木社長は退陣した。

かわって登場した福井社長は、「株式を持たないサラリーマン社長では経営はできない」と瀬木前社長から博報堂の持株会社「仲和」と財団法人「博報児童教育振興会」、それに瀬木の所有株について議決権行使(発行済株式の六〇・六〇)の「委任状」を取り、全社員に対しては、「五年後には、普通の総水揚げの五割合まで博報堂の扱い高を増やす」とぶちあげた。

話は前後するが、福井は社長就任の九日前の四七年二月二日に「亜上」という会社を設立している。資本金はわずか二百万円、のちに博報堂の株式の三〇・六〇を所有するトンネル会社の資格を持つにいたる会社だが、結局亜上は博報堂の株式保有の過程で犯罪行為があったとして、

福井純一は特別背任容疑で東京地検特捜部に逮捕(五〇年二月二七日)される原因をつくらした。

では、博報堂を拠点にして、見玉はどのような形態の言論出版統制機関を作ろうとしたのだろうか。一つは、博報堂の取引先企業の会社を見玉系列に組み込んでいく。こうすることによって、博報堂の水揚げも増え、また系列化された企業からマスコミに対する苦情、注文が直接見玉のところに持ち込まれやすくなる。二つは、この苦情や注文をよりどころにしてマスコミを操作し、それでも見玉の側につかない情報産業は、博報堂を経由した宣伝広告を受け付けさせないようにすることだった。最初はこの二つの目的を持ったセクションを博報堂の内部機構の一つとして充てさせたが、「対外的に見て広告会社の仕事としては品位に欠ける」ということで、持株会社の「仲和」(三五年一〇月設立の前身を「博報堂コンサルタント」(五〇年七月)に変え、この会社に請負わせることにした。そして定款にも「企業経営ならびに人事に関するコンサルタント業務」の項目をわざわざ加えた。博報堂コンサルタントという会社は「トラブル買います」の看板を堂々と掲げたわけである。役員は、灰田隆二郎社長のほかに、町田欣一、山本弁介、太刀川恒夫が各役として名を連ねたが、灰田は福井の大学時代のラッビー部関係者で、菅福彦が関西系暴力団の準構成員としてマークしていた要注意人物。町田は元警視庁刑事部主幹。山本は元NHK政治部記者。そして太刀川は見玉側近グループのなかのサンバードンで、見玉が脳血栓で倒れたあと、完全に見玉の分身となった人物であることはすでに述べた。

博報堂コンサルタントは、まず企業を見玉の系列下に置く作業から始めた。それも、主として

電通が宣伝広告部門で独占契約をしている企業を標的にしたのである。「三越」「味の素」などがそれであった。しかも、これらの会社を博報堂と取引させざるために、見玉の息のかかったブラック・ジャーナリズムを起用したのである。

東京地検特捜部、警視庁、国税庁のロッキード事件合同捜査本部は五一年二月二四日、見玉岩士夫の自宅を家宅捜索した。その際、十数社にのぼる政治・経済雑誌の会社株券が多数発見された。それは、見玉がブラック・ジャーナリズムに資本金の形で出資し、連帯を深めていたことを物語っていた。またこれら新聞、雑誌のなかには、見玉とは別に博報堂と資本提携を結んでいたものもあり、博報堂の口ききで三菱地所など一流企業が所有するビルの中に事務所を開設していたものもあった。ともかく見玉——博報堂——ブラック・ジャーナリズムと、金銭で結びついていた三吉が、おれいをつけた企業を見玉の系列下に置くために動いたのは事実である。「三越」も「味の素」も、このために電通が独占していた宣伝広告部門の一部を博報堂にさかねばならなかった。そしてロッキード事件が暴かれてくる現在でも、これら被害にあった会社の担当者、博報堂と取引し関係を結んだ理由を聞かれても、「まあ、いろんなことがありました」と語るだけで、どうしてそうなったのか、真相に触れるのを避けているのである。

福井純一が特別責任で逮捕されたあと博報堂を追われ、見玉岩士夫もロッキード事件のカギを担ぐ重要嫌疑者となった現在、言論出版統制機関をつくる構想は挫折したのが……。

わが国第二位の大手広告会社博報堂は、役員の名に元警察高級官僚の天下り組が意外に多い。

福井が特別責任で逮捕された事件を取材した新聞記者は、元警察関係役員とからませてつぎのように説明した。

「警視庁は今年の九月をメドに『土地カン情報管理システム』を策定させるが、見玉らはこれを利用して会社の乗っ取り、マスコミ支配を進めようとしていたのではないか。このシステムは都内を二万七千個のメッシュ（網の目）に分けて、前歴者、暴行不良者、非行少年をネット・インしてコンピュータに覚え込ませるほか、氏名、生年月日、本籍、住居、勤務先なども記憶させている。だから会社乗っ取りの場合など社長からヒラ社員に至るまで必要な情報を短時間に入手できるわけだ。そして、見玉はこの警察の資料をもとに、言論出版を自由にコントロールしようとした。そのためにも、元警察高級官僚を役員に入れて、警察関係とコネクションをもつ必要があった」

事実とすれば、恐ろしい計画であったわけである。もともと警察機構が見玉の意図にたやすく乗ったかどうかは、今となっては不明だが、「見ざる政府」を構築した自らが言論統制問題をやらせたとしたら、ゾッとする話ではないだろうか。

日本と韓国—利権の相関図

見玉岩士夫は戦後三〇年間——実際は乗物置所を出所してからだが——という長い歲月をかけて強大な権力を持つ「見ざる政府」を作りあげた。もともとこの政府は、民族主義に共鳴し、